世界の言語障害学：最近の動向

国際医療福祉大学 笹 沼 澄 子

はじめに

40 年史の執筆分担をお引き受けすることにしたところ、「世界の言語医学」という題名を頂戴してしまった。無論このテーマにふさわしいものを書き上げる力量は持ち合わせていないし、締切も迫っている。思案の末、「最近の動向」という副題をつけて対象範囲を絞るとともに、臨床・研究面のマクロな動向に主眼を置く（たとえば研究内容の詳細や質的側面には立ち入らない）ということで、何とか責を果たさせていただくことにした。

方法（参考資料の種類と収集法）

以下にあげる複数の資料を参考にし、筆者自身のバイアスも交えて整理・解釈する。対象分野は言語病理学（Speech-Language Pathology）の諸分野（ただし音声障害、吃音、さらに聴覚障害関係の3分野に関しては他の執筆者が担当されるので対象外）とする。

資料 1 言語病理学の領域で世界の牽引役をもって任ずる米国での動向を探る目安の一つとして、American Speech - Language - Hearing Association (ASHA) の学術集会における各分野別演題数と演題内容 (ASHA/October 1983~1993 発行の Convention Program 号²⁾) を参照した。また、これを補う関連学会の資料として ASHA 以外の学術団体 Academy of Aphasia, Clinical Aphasiology Conference, American Cleft Palate-Craniofacial Association などの最近の活動も参考にする。

資料 2 北米の動向とは別に、英国を中心とするヨーロッパ諸国においてもいくつかの動きが認められる。この動向の一部を反映すると思われる学術誌 Cognitive Neuropsychology (1984 年創刊)⁵⁾, Aphasiology (1987 年創刊)³⁾ などの内容、および International Aphasia Rehabilitation Conference (1988 年発会) の活動も参考とする。

資料 3 わが国における言語病理学の諸分野（言語発達、機能的構音障害、口蓋裂言語、失語症、運動障害性構音障害および関連諸分野）で長年にわたり臨床・研究の第一線で仕事をしておられる数名の方々に

お願いし、①各自の目に映った各分野別の過去 10 年間の世界的動向、および②この動向を反映する専門誌、単行本などをあげていただいた。さらに最近海外で言語病理学関係の活動に参加する機会をもたれた数名の方々には個別に特定の情報、ご意見などを伺った。

その他 上記 1, 2, 3 の資料からもれている国際交流、協同研究など。

結果（資料の分析）と解釈

1. 資料 1 からの知見：ASHA 学術集会を中心とする北米での動向

1) ASHA 関係

最近 10 年間の ASHA Convention 号のうち、〈Topical Listing〉の記載のある最近 3 年間 (1991~1993) の資料について各分野別の演題数を整理したのが表 1 である。演題の中には Short Courses, Miniseminars, 口頭発表, ポスター, その他(ビデオ, フィルムなど)が含まれる。

この表をみてまず驚くことは、その膨大な演題数である。本稿の対象領域全体の演題総数は毎年 800~900 題に近く、対象外とした前述の 3 分野（音声障害、吃音、聴覚障害）を加えると優に 1,000 題を越える。しかも、これらの演題数はその約 2 倍の 2,000 を越える応募演題の中から厳選されたものであり、この数字は過去 10 年間 (1983~1993) を通じて多少のゆらぎはあるにせよほぼ不変である。ちなみに、20 年前の 1973 年の演題総数は約 500 題であったから、1973~1983 の 10 年間に約 2 倍に増加したことになる（このような演題数の増加の背景には無論 ASHA の会員数の著しい増加があったわけであり、1973 年には約 2 万人であった会員が 1983 年には約 4 万人に増え、1993 年には 6 万人を突破した。さらに ST の専門教育が学部から大学院にレベルアップされたことによる会員の資質面の向上が寄与している可能性もあろう）。なお、この学術集会のもう一つの特徴は、Miniseminar, Short Course, Instructional Lab. などと称する会員向けの卒後教育 continued education をねらった演題が多数設けられていることであり（通常の発表論文総数の 30 % 前後）、会員の参加率を高めるための目玉となっている。

次に各分野別の動向をみる目的で、まず(1)これら膨大な演題がどのような分野にどう分布しているかを調べ(表1の各分野別論文数参照)、次に(2)この分布状況がたとえば10年前または20年前の傾向とどう違うかを比較検討した。なお、1990年以前のASHA Convention号にはTopical Listingの記載がなく、また各分野の見出しも毎年一致しているとは限らないので、この比較はおのずからきわめて大まかなものにならざるを得ないことをご了承いただきたい。以下は、こうした比較を通じて明らかにされたいくつかの変化ないし推移についてまとめたものである。なお、こうした変化/推移の多くはその兆しがすでに1970年代もしくは1980年代の前半から認められており、その後しだいに顕在化し今日に至っている。

(1) 成長・発展の目立つ分野：

①頭部外傷(外傷性脳損傷)、痴呆、右半球損傷などに伴う言語・コミュニケーション障害：この分野は表1-⑤のAPHASIA & ACQUIRED NEUROGENIC DISORDERSという項目の下線の部分に相当し、'70年代の後半から'80年代にかけて次第に注目を集めるようになり、失語症にならぶ位置づけを獲得するようになった。これらの分野に共通する特徴の1つは、障害が狭義の言語機能に限定されず言語外の認知機能にも及ぶことであり、評価・治療面でも新しい概念・方法論の導入(後述)が必要である。理論・臨床の両面において今後ますます重要性を増す領域となろう。

②嚥下障害：10年前は散発的にしか取り上げられることのなかったこのテーマが、現在ではMOTOR SPEECH DISORDERS & DISPHAGIA(表1-①)という項目からも明らかなように運動障害性構音障害と肩をならべる分野に成長した。この背景には、頭部外傷、脳血管障害などの患者に対する急性期からの治療的働きかけという新たなニーズが引金となり、このニーズに対応した知識・技術の開発(たとえばvideo fluorographyによる嚥下動態解析法など)が、医師、ST、その他のコメディカルメンバーから成る専門チームによって急速に進んだことが今日の発展につながったと考えられる。特にSTは、発声発語器官でもある嚥下器官の形態・機能および訓練についての基礎的な知識を有し、かつ嚥下障害に高率に合併する発声・構音障害、失語、高次脳機能障害などへの対応はST本来の守備範囲であることもあって、こうした専門チームでの中心的役割を果たすのはSTである場合が多い⁷⁾。対象は頭部外傷、脳卒中(特に脳幹梗塞)の患者の他に、進行性神経・筋疾患(筋萎縮性側索硬化症、パーキンソン病など)、さらに小児の先天性または後天性諸

疾患に伴う摂食・嚥下障害にも及び、この分野に対するニーズは今後さらに増大することが見込まれる。

③補強・代替コミュニケーション手段の開発・利用を目的とするAUGMENTATIVE & ALTERNATIVE COMMUNICATION(AAC)(表1-⑥)：この領域も最近10年ほどの間に一つのまとまった分野を形成するまでに成長した。AACの対象となるのは、いうまでもなく重度/重複障害者、進行性神経・筋疾患患者などであり、その意味で上記①および②の動向と無関係ではありえない。従来は身体/運動障害(例：脳性麻痺)に基づくコミュニケーション障害患者が主たる対象であったが、最近では言語・認知レベルの問題をもつ失語症その他の患者をも対象に含めた実験的試みが行われている。個々の患者のコミュニケーション上の特殊なニーズや残存する認知機能とハイテクとが結びついた学際的領域であり、今後さらなる発展が期待される分野といえる。

④コンピュータの利用(表1-⑪)：'80年代の初頭からいくつかの障害分野で急激な脚光を浴び始めたコンピュータ利用の動向が、いまやMICROCOMPUTER APPLICATIONという独立した項目だててを獲得し、ST業務のあらゆる側面で多彩な役割を演じている。ちなみに、この分野の演題数は他の諸分野と比べて見劣りがしないばかりか、T. P. 欄の演題数に対するS. M. 欄の演題数の比率が格段に高いことが特徴である。この分野に対する会員の強い興味と学習意欲を反映するものであろう。

⑤CULTURAL & LINGUISTIC DIVERSITY(表1-⑩)：米国の文化的・言語的多様性を反映して、1992年からこの項目が新たに登場した。2ヵ国語(多国語)使用者(児)の言語・コミュニケーション障害、文盲問題などをも含む幅広い働きかけが、以前にも増して活発化している。

(2) 従来とは異なる名称で呼ばれるようになった分野：

これに該当するのは、いわゆる「機能的構音障害」functional articulation disordersと呼ばれてきた領域である。1970年代から1980年代の前半にかけて、この問題に対する音韻論的視点からの関心が急激に高まり、現在ではPHONOLOGICAL(/ARTICULATORY) DISORDERS(表1-⑦)の名称が定着してきている。つまり、名称の変更はアプローチの軌道修正をも反映しており、音韻論的視点に立った構音障害の概念化、評価・訓練法の再構築、語音の正常発達データの分析、などに関する演題数が多数を占めている。従来はどちらかといえば構音動態レベルの問題として捉えられて

きた構音の問題を、音韻発達という言語学的視点から捉え直すことになったわけであり、このことは、「言語発達遅滞」(自閉症、学習障害、読字障害などの発達神経心理学的障害をも含む)にみられる音韻発達の異常・遅れの問題などをも視野に入れた対象の拡大を意味する。今後の発展が注目される領域といえよう。

(3) Topical Listing から消えた分野：

口蓋裂関係の項目は1991年のPHONOLOGICAL DISORDERS AND CRANIOFACIAL DISORDERS (表1-⑧)を最後に、Topical Listingからは姿を消した。口蓋裂に関する個々の演題数も全体として減少の一途を辿っている。その主な原因は、①形成外科領域の技術的進歩により鼻咽腔閉鎖機能不全に由来する構音障害の発生率が減少したこと、②この領域の活動の中心がASHAからAmerican Cleft Palate-Craniofacial Associationに移ったこと、などに求められる。なお現在この領域は、ASHAの特別プログラムSpecial Interest Divisionの中のSpeech Science and Orofacial Divisionで扱われており、咬合、歯列、口蓋の形態異常などに由来する構音障害の問題にも対象範囲を広げた活動を展開している。

これと類似の現象は失語症およびその関連領域(表1の⑤APHASIA & ACQUIRED NEUROGENIC

DISORDERS)にも現れ始めている。たとえば失語症の演題数はここ10年余りの間に確実に減少している。'60年代から'70年代にかけて次々に発足したAcademy of Aphasia, Clinical Aphasiology Conference, International Neuropsychological Societyなどが、失語症および関連領域の主要な情報交換の場となったことが最大の原因といえる。

なお、上記(1), (2), (3)で取り上げなかった残りの分野(表1の②~④, ⑨, ⑫~⑭)は、特に目立つ変動が認められなかった分野ではあるが、おのおのが関連諸科学の進歩と合い携えて順調な発展を続けていることはいうまでもない(一部後述)。最後の⑫~⑭は職能団体としてのASHAが、専門職に関わる幅広い問題を取り上げ討議する場であり、この分野の演題数が全体に占める割合は決して低くない。演題内容は学生の養成、資格試験、専門職としての資質維持・向上、卒後教育、supervisionをめぐる諸問題、他職種との関係等々多岐にわたる。

以上、ASHAの学術集会に反映される言語障害の臨床・研究面の動向を一覧したが、こうした動向をもたらした背景要因は何であろうか。その一つは、文化・社会そして疫学的な時代の推移を反映する“consumer needs”の変化であり、このニーズに敏感かつ積極的に

表1 1991年~1993年のASHA Convention Program (Topical listing)

	1991 S.M./T.P	1992 S.M./T.P	1993 S.M./T.P
① MOTOR SPEECH DISORDERS & DYSPHAGIA	12/37 5/24	14/75 6/35	12/40 7/30
② SPEECH SCIENCE	3/27	4/57	3/25
③ LANGUAGE ASSESSMENT	20/80	28/55	23/237
④ LANGUAGE INTERVENTION	25/37	30/75	37/10
⑤ APHASIA & ACQUIRED NEUROGENIC DISORDERS	15/67	14/44	21/17
⑥ AUGEMENTATIVE & ALTERNATIVE COMM.	12/22	14/45	29/5
⑦ PHONOLOGICAL (/ARTICULATORY) DISORDERS		16/49	16/10
⑧ PHONOLOGICAL DISORDERS & CRANIOFACIAL DISORDERS	18/60		
⑨ LANGUAGE SCIENCE	13/70	23/68	8/19
⑩ CUL & LING DIVERERSITY		12/37	22/0
⑪ MICROCOMPUTER APPLICATION	44/44	32/32	27/36
⑫ SERVICE DELIVERY		35/72	33/146
⑬ TRAIN.& REG. ISSUES		24/53	35/6
⑭ PROFESSIONAL ISSUES	61/92		
	228/560	252/697	273/581

S.M. : Short course or miniseminars

T.P. : Technical papers or poster sessions

注：その他の主要な項目として FLUENCY, VOICE, AUDIOLOGY 関係があるが、これらは対象外なのでこの表には含めなかった。

対応してきた ASHA の努力が実を結んだ結果とみることもできよう。たとえば、人口の高齢化に伴う疾病構造の変化（重度失語症、進行性の変性疾患、特に痴呆患者、などの急増）、交通事故による外傷性脳損傷例（特に若年層の患者）の増加、医療技術の進歩による重症患者の存命率の上昇などの総合的結果として、ST の対象範囲が広がるとともに、対象者の中に占める重症患者（言語機能にとどまらず種々の認知機能に障害が及び、予後不良例が少なくない）が占める比率が急増している。上記(1)の①、②、③の変化はまさにこうした現象から生まれたニーズへの適切な対応を反映したものに他ならない。さらに、米国特有の多民族社会における文化的、言語的背景の多様性から派生するさまざまな問題ないしニーズがあり、これが上記(1)～⑤のような発展の引金となっているのであろう。

一方、隣接領域における知識・技術の進展——特に医学系の諸領域（高次脳機能の究明を含む脳科学、脳の画像診断技術、その他）、心理学系（神経心理学、認知心理学など）、言語学（近年脚光を浴び始めた pragmatics 語用論の側面）、情報科学、コンピュータその他のハイテク技術の進歩——にはめざましいものがあり、こうした進歩が言語病理学の基礎部門である speech science, language science（表1の②、⑨）などの発展、ひいては臨床技術の諸側面の改善に直接・間接に結びついていることはいうまでもない。

2) ASHA 外の動向

ASHA 以外の動向として最も注目されるのは、失語症その他の高次脳機能障害（頭部外傷、痴呆、右半球損傷など）の分野である。対象の分化・拡大と関連分野の広がりに伴い、複数の学術団体（Academy of Aphasia (AA)³⁾、Clinical Aphasiology Conference (CAC)⁴⁾、International Neuropsychological Society (INS) など）が結成され、おのおの特徴的な学会活動を展開している。

AA は、上記の疾患群に特有な言語・認知面の病態構造の究明に主眼をおき、多数の関連領域（言語学、神経心理学/認知神経心理学、言語学、言語病理学、神経科学など）の専門家を会員とする学際的な集団である。最近の演題の傾向をみると、失文法、失読・失書、痴呆/記憶障害などとの関連における形態論と統語、読み書きの情報処理モデル、談話能力、エピソード記憶/意味記憶などをテーマとしたもの、さらに脳の画像診断技術（特に PET による activation study 技法）の適用により脳における特定の言語過程や機能回復のメカニズムを探る試み、などが目立つ。これと対象的に、CAC は患者のリハビリテーションに焦点を合わせた臨床重

視の学会であり、日々の臨床に直結する諸問題が議論の中心を占める。参加会員も大多数が言語病理学者である。最近の傾向として、言語機能の改善を重視する従来の刺激法に加えて、患者の実生活における実用コミュニケーション能力の改善を重視する（ジェスチャーや種々のサインなど非言語的手段をも積極的に利用する）アプローチが提唱され、その具体的方法や訓練効果が論議されている。一方、INS は神経心理学的諸問題全般を対象領域とする学会であり（毎年アメリカおよびヨーロッパの2箇所で開催される）、失語症その他の神経疾患における言語・コミュニケーション障害も重要な領域の一つとなっている。こうした複数の動向が aphasiologists たちの ASHA 離れの一因になっているであろうことは間違いない。

なお、口蓋裂言語については、前述のように鼻咽腔閉鎖機能に関連する構音障害例の減少に伴い、口蓋裂中心であった臨床対象を頭蓋顎顔面に関するさまざまな疾患に由来する構音の問題にも広げている。こうした現象を反映して、口蓋裂関係の伝統的な学術誌 *The Cleft Palate Journal* にも 1991 年から “Craniofacial” の語が加えられ、*The Cleft Palate-Craniofacial Journal* という名称に改名された。いずれにしてもこの分野における臨床・研究は今後一段と学際性を増すことになるだろう。

2. 資料2からの知見：英国・ヨーロッパ諸国の動き

全般的な動向は北米のそれをほぼ反映しているとみてよい。一方、米国での大勢とは異なる独自の動きも認められる。その一つは、英国を中心とする認知心理学の発展と神経心理学とがドッキングした認知神経心理学 cognitive neuropsychology に理論的根拠を求めるアプローチである。認知心理学とは、言語を始めとする多彩な高次（認知）機能を脳における情報処理過程におきかえてモデル化し、人間の情報処理の本質を探ることを目的とする領域である。'70 年代の末から失語、失読、失書などを含む神経心理学的諸問題への適用の試みが始まり、以後関連諸分野の広い注目を集めつつある。1984 年に学術誌 *Cognitive Neuropsychology* が英国で発刊されたのを皮切りに、この用語がタイトル（またはその一部）に使われている単行本の出版が相次いでいることも、この間の事情を物語るものであろう。無論、言語病理学（特に失語、失読、失書）の臨床・研究面への影響も著しく、障害された言語過程の検索・同定（ひいてはより適切な言語訓練プログラムの開発・選定）に役買っている。

上述の学術誌 *Cognitive Neuropsychology* が言語

のみならずその他の認知機能障害（失行・失認，記憶障害など）を広く対象とするのに対し，Aphasiology: An International Interdisciplinary Journal（1987年英国で発刊）は，失語症の臨床家を主な読者対象とする国際誌である。内容的には失語症学における最近の主要な動向が比較的バランスよく反映されており，英国発祥の認知神経心理学的アプローチにとどまらず，米国のCACやAAでのトピックがReview, Clinical Forumなどのかたちで幅広く取り上げられている。

ベルリンの壁が崩壊する前年の1989年には，International Aphasia Rehabilitation Conferenceがヨーロッパ諸国のaphasiologistsの有志によって発会し，毎年1回の国際会議が会員の回り持ちによって開催されている。筆者もすでに2回参加する機会を得たが，会議の内容は上述のAphasiologyのそれに近いバランスのとれたものであり，失語症の臨床・研究における最新の話題がほどよく代表されている。STたちが，ジープにリックサック姿で国々の間を自由に行き来し，密度の濃い情報交換が急速に進んでいる現状を目の当たりにすると，わが国におけるこの領域の立ち後れが一層際だってみえてくる。

3. 資料3について：アンケート調査の結果から

アンケート調査から得られた各分野別の情報の一部は，すでに種々の形で上述の結果および考察に織り込ませていただいた。ここでは，複数の分野に共通して認められる臨床・研究面の動向として，以下の3点に注目することにした。

①言語治療の対象の広がり：運動障害性構音障害に加えて嚥下障害が，また失語症に加えて各種痴呆，頭部外傷，右半球損傷などに由来する言語・コミュニケーション障害が，STによる専門的な評価・働きかけの対象として取り込まれる傾向が強まりつつあることはすでに述べた。こうした対象の広がりや言語発達遅滞の領域にも及び，これまで対象外とされていた超重度障害児，いわゆる“学習障害児”の一部，などに対してもSTの積極的な働きかけが行われるようになった。

②治療的アプローチの多様ならびに働きかけのレベルの拡大：対象の広がりや相俟って，コミュニケーション障害への働きかけの方法論も一層多様化の様相を強めている。神経心理学，認知心理学など関連領域との連携による新しい視点/方法論の導入/開発が成人・小児の言語・コミュニケーション障害への対応に重要な影響を及ぼしていることはすでに指摘した。また，これまでSTの専門的働きかけの主力が機能障害（WHOの分類によるimpairment）に集中する傾向

があったのに対し，最近は機能障害から生じる能力低下（disability）や社会的不利（handicap）レベルの問題への専門的な取り組みも重視する風潮が高まりつつある。こうした傾向は成人・高齢者にみられる言語障害（失語症，運動障害性構音障害，その他）にとどまらず，小児期の言語障害（言語発達遅滞，音韻障害など）にも及んでいる。実際のコミュニケーション場面における語用論的側面pragmaticsの重視，構音障害における明瞭度intelligibilityへの注目，代替コミュニケーション手段としての身振り，視覚シンボル，補助機器の開発・利用の強化なども，こうした文脈で捉えることができよう。

③関連領域との連携・チームアプローチの強化：上記①，②の動向は当然のことながら隣接する専門諸領域（神経心理学，認知心理学，認知科学，認知神経心理学，発達神経心理学，神経学その他の医学系諸領域など）における理論・技術の発展に負うところが大きい。今後臨床・研究の両面でこれらの領域との連携ないしチームアプローチの重要性はますます高まることが予想される。

4. その他：国際交流，異言語間の協同研究など

この面でのデータは筆者自身の周辺のものに限定されるが，異なる言語間におけるspeech/languageの諸症状についての比較研究への関心はここ10数年来確実に高まりつつある。国際誌への投稿論文や専門書の分担執筆の中に，日本語の文字言語^{10,11)}，構文構造⁸⁾，音韻構造の特徴を反映したさまざまな言語症状（例：失読，失書，失文法など）の記述/分析，評価・治療法などをテーマとしたもの，review，その他⁹⁾が着実に増えている。国際化が進むなかで，2ヵ国語（多国語）使用者の失語症の問題も，避けて通れぬ差し迫った臨床・研究課題となりつつある。ちなみに，IALP Aphasia Committeeにおける現在の研究テーマは“Bilingual Aphasia”であり，1995年の第23回国際会議（カイロ）に向けて研究論文集の編集⁹⁾が進行中である。

むすび

冒頭でお断りしたように，言語障害学の臨床・研究面における最近の世界的動向について，マクロな（そして多分に個人的な）視野に立ったスケッチを試みた。報告をまとめる過程で再三思い知らされた冷厳な事実の一つは，わが国におけるこの領域の紛れもない立ち後れである。ASHAの会員数は1984年に40,000を越え，1994年現在70,000名に近づきつつある。会員の資質の点でも全体として明らかに向上している。こうした層の厚さの威力は，ここ10年間における臨床・研究

の目ざましい発展・拡充にも反映されている。一方、ヨーロッパ諸国における伝統的な臨床・研究活動も、壁崩壊に象徴される相互の密接な交流と相俟って急速な進展をみせている。わが国におけるこの領域の当事者たちが、このような世界的動きの中で現状をどう受けとめ、何を目標とし、どう行動するかが問われているといえよう。

謝辞：ご多忙のなかアンケートへの反応またはその他のかたちでご協力を賜った相野田紀子、伊藤元信、遠藤教子、大石敬子、岡崎恵子、小林範子、小寺富子、鈴木 勉、種村 純、藤田郁代、船山美奈子、物井寿子、綿森淑子の諸先生に心からお礼申し上げる。

参考資料/引用文献

- 1) Academy of Aphasia Programms 1984～1993
- 2) American Speech-Language-Hearing Association : ASHA, October issues of 1984～1993.
- 3) Aphasiology, Vol. 1 (1987) ～Vol. 7 (1993).
- 4) Clinical Aphasiology. Vols. 13(1984)～22(1993), PRO-ED, Inc.
- 5) Cognitive Neuropsychology, Vol. 1(1984)～Vol. 7 (1993).
- 6) Holland, A.L. and Forbes, M.M. (Eds) : Aphasia Treatment : World Perspectives. Singular Pub. Group, Inc., 1993.
- 7) Logemann J.A. : Evaluation and Treatment of Swallowing Disorders. College-Hill Press, 1983.
- 8) Menn, L. and Obler, L.K. (Eds) . : Agrammatic Aphasia : A Cross - Language Narrative Sourcebook. John Benjamins, 1990.
- 9) Paradis, M. (Ed.) Aspects of Bilingual Aphasia. Pergamon Press, 1995.
- 10) Patterson, K.E., et al. (Eds) . : Surface Dyslexia : Neuropsychological and Cognitive Analysis of Phonological Reading. Lawrence Erlbaum, 1985.
- 11) Sasanuma, S. : Neuropsychology of reading : Universal and Language-specific features of reading impairment. In Bertelson P., et al. (Eds.) : International Perspectives on Psychological Science, Volume 1 : Leading Themes, Chap. 6, pp.105～125, Lawrence Erlbaum, 1994.
- 12) Seron, X. and Deloche, G. : Cognitive Approaches in Neuropsychological Rehabilitation. Lawrence Erlbaum, 1989.